

めざす児童生徒像

- ・自主・自律・活力ある丸中生徒
- ・主体的に学習や活動に取り組む生徒 (自主)
- ・自らを律し、他と協調し、心を通わせることができる生徒 (自律)
- ・進取の気性に富み、たくましく生きる力を持った生徒 (活力)

※児童生徒結果 - 教員結果・保護者結果

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間				年度末				達成状況の分析	改善策
				教員			※差	教員			※差		
				児童生徒	保護者	児童生徒		保護者					
(学校で設定)	授業づくり	①②の割合が100% ③の割合が90%	① 生徒が主体的に学びたいようになるような単元デザインを工夫している。	100	95	90	87.6	どの項目も、最終評価で目標指数を達成しなかった。 ①「振り返りシート」を作成することで教員が単元全体を見通して指導計画を立てることができているに有効である。 ②数値が上昇した。本校の「学びの心構え」(自分の考えをもち、根拠をもとに伝えよう。比較しながら聴き、自分の考えを広げよう。)が学校研究の取組として定着してきた。 ③教員の記述回答からも、協働の場での活用を意識していることが見られる。	①学校研究の取組方法の工夫改善を行う。年間を通して一人一人の教員が各自の実践においてPDCAが回せるような仕組みを取り入れていく。 ③教員間の実践交流を継続して実施する。また、小松市で採用しているスクリーンワークの活用はもちろん、その他クラウドを活用した別のソフト等も市教委の許諾を得られるものに関しては積極的な活用を推進していく。				
			② 「丸中学びの心構え」に基づき、「聴く」「伝える」姿勢を定着させるための具体的な手立てを講じている。	89		95							
			③ 協働的な学習の場面で、学習用端末を活用している。	50		72							
重点項目	業務の改善	①の割合が70% ②の割合が80%	① 80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	67		81		どちらの項目も、最終評価で目標指数を達成した。 ①全体的に教員の削減意識が向上している。反面、退勤時間が短くなっても持ち帰り仕事が増えているのが現状である。 ②職員の参画意識がさらに向上している。若手の教員に業務を任せ育てる視点も重要である。	業務の精選を継続して行うことで、教員が心身ともに健康で余裕のある状態で生徒一人一人と向き合う時間を確保していきたい。そのため、教育課程の見直しやカリキュラム・マネジメントのさらなる推進が必要である。また、業務に不慣れな若手へ管理職・主任からの適切な支援も行っていく必要がある。				
			② 学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができる。	89		95							
重点項目	学校研究	①②の教員の割合が前期80% 後期90%	① 研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元(授業)構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	78		81		①後期の目標指標を達成できなかったが、「よくあてはまる」と最も肯定的な回答をした教員は前期よりも倍増した。「授業づくり」の項目①の内容の成果と考えられる。 ②後期の研究協議では、具体的な助言や代案を協議する形式に改善を図った。	目指す授業像の学校としてのイメージ共有が大切である。現在の取組の良いところは継続しつつ、重点化・重点化を行い、取組を徹底するという流れをより意識して学校研究を推進していく必要がある。特に、授業研究会の成果を個々の教員が自らの授業改善に生かすかを明確にしていける必要がある。				
			② 授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	94		95							
重点項目	指導力の向上	①②④の教員の割合が前期80% 後期90%	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	88.9	89	0.1	81	88.7	7.7	後期の目標指標に達しなかった項目がいくつかある。 ①生徒の意識は前期とほぼ同一であるが、教員は数値が減少し、生徒と教員との差が広がった。学習課題の質を向上させる必要がある。 ②本校生徒の良さを生かして現状を維持することが大切である。 ③①と連動の結果となり、教員の教員は向上した。「授業づくり」の項目②で挙げた「学びの心構え」を共通実践したことによる成果であると考えられる。また、授業や特別活動の中で、生徒が自らの考えを表現する場も設定されている。 ④話し合い活動での生徒の状況の見取り方を教員が工夫する必要がある。⑤同様、良い姿には認める声掛けを行う。 ⑥振り返りの視点が生徒と十分に共有され、かつ学びを自覚するためには有効なものであるかを教員部と研究部で確認する。	①毎時間の学習課題を吟味する必要がある。毎時間の課題が作業課題(〜しよう)ばかりではなく、思考課題(〜はなぜだろうか、〜にはどうすればいだろうか、等)が単元の適切な場に取り入れられているかを教員部等で検討していく。 ②生徒自身が自らの活動の成果をメタ認知できるような場の設定が必要である。特に③は教員と生徒の意識の差が大きい。生徒の良い表現を機会を逃さず価値づけし、共有することでさらに生徒の力が向上すると考えられる。 ④話し合い活動での生徒の状況の見取り方を教員が工夫する必要がある。⑤同様、良い姿には認める声掛けを行う。 ⑥振り返りの視点が生徒と十分に共有され、かつ学びを自覚するためには有効なものであるかを教員部と研究部で確認する。		
			② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	88.9	89.4	0.5	90	90.4	0.4				
			③ 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	77.8	76.8	-1	89	75.3	-13.7				
重点項目	学力の向上	①②③④の平均が中間…70% 年度末…75%	① 児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達との考え(自分と同じところや違うところ)を受け止めて自分の考えを伝えている。	77.8	77.6	-0.2	72	84.9	12.9	①働き方改革の視点からも、カリキュラム・マネジメントを絵に描いた餅にしないようにするべきである。そのためには、「使える」「常に意識する」カリキュラムマップとしていくことが重要である。 ④情報交換の成果を、職員全体に共有することで教員の意識向上を図る。小学校修了時の生徒の強みと弱みを教科部ごとに把握し、中学校での指導に生かす視点を確認していく。			
			② 児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立している。	78		71							
			③ 全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	89		90							
重点項目	家庭学習	①②の割合が75%	① 指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	67		86		平均値では、目標指標を達成したが、項目別では十分とはいえないものもある。④は、芦城小・権松小・第一小・芦城小、本校の5校の教務主任が学期に1回、年3回の会合をもち、情報交換や共通実践等について検討している。今年度は、国と県の学力調査の結果から自校の児童生徒の状況を分析した「学びのみちるべ」をもとに各校の状況を共有したり、「家庭学習強化週間」を5校で統一して実施したりした。 ①次年度より新しい教科書の使用となる。2月のうちに新年度の教育課程を明確にした「カリキュラムマップ」を作成済である。	ある程度自由に端末を家庭に持ち帰ることができる枠組みを検討していく。そのためには、使用のルールや翌日忘れずに持ってくるなどの基本的な指導が肝要である。そのうえで、授業と家庭学習をつなげる課題を提示していくことが可能となる。				
			② 児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立している。	78		71							
			④ 校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。(小中連携)	61		67							
			74		79								
			① 家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方を校内で共通理解の課している。	77.8	67.7	61	-10.1	77	69.9	61.6	-7.1		
			② 学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	66.7	67.7	51	1	67	50	47.3	-17		